

点描ぐんま経済

日銀支店長

見聞録

■138■

構想した。

小栗は、産業・流通・金融を一体整備し、わが国が列強と対等に渡り合う独立国家となることを

見えないバトンリレー

目指した。横須賀では、フランスの協力のもと、造船所内に技術者育成機関「疊舎」も創設。外国の知見を活かし、自力で学び、次の世代を育てる。こうした近代国家づくりのモデルが、江戸末期にすでにあって、小栗は間

違はなくその中核の仕事

をやった。

読者の皆さんには、「国営模範工場、フランス人技師、後進育成」のキーワードでピンとくる方も多いのではないか。そう、富岡市の世界文化遺産「富岡製糸場」（1872年開業）も同じモデルで作られたのだ。しかも、設計やれんがなどの部材

とした江戸・横浜で実現した。国内最初の銀行設立を実現し、富岡製糸場の開業にも深く関わった渋沢栄一など、後進が具体化させたインフラづくりは、小栗からの見えないバトンリレーが生きたものだと考えられる。

小栗の菩提寺である東

善寺（高崎市）には、盟友栗本鋤雲と並んで胸像がたたずむ。栗本著の

「土蔵付」であるもの（「土蔵付」であるべきだ。そういう視点で働かないといけないという言葉だ。少欲より大欲を考えた小栗の早過ぎる死が悔やまれるとともに、彼の業績の顕彰を望みたい。

小栗の構想 後進が実現

は、横須賀から移植されたそうだが、小栗は、鉄道建設に加えて、銀行の設立、中央銀行の創設までも構想していた。こうした構想は、江戸幕府の終焉とともにとん挫した。しかし、

鉄道建設については、明治に入って、小栗が候補



宮 将史（みや・まさふみ）

1974年生まれ。神奈川県出身。一橋大経済学修士。2000年日本銀行入行、政策委員会室国会渉外課長などを経て24年7月から現職

先月の本欄で、2027年のNHK大河ドラマの主人公・小栗上野介忠順の業績を肌で感じたエピソードに触れた（日銀前橋支店HP「支店長のページ」参照）。幕末期（1865年）に、わが国近代化の嚆矢となる横須賀造船所（神奈川県）の建造に取り組んだ小栗。彼が描いた未来図は、単なる工場建設や幕政改革に止まらない。小栗は、外国との貿易を担う総合商社「兵庫商社」や貿易金融を担う「為替会社」の創設を主導したほか、鉄道建設も